

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 4月 27日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820054

研究課題名（和文） 教会政治戦略としての美術寄進活動—15世紀の聖アントニウス修道会士を例として

研究課題名（英文） The foundation as ecclesiastical politics: about a canon of the hospital brothers of St. Anthony in the 15th century

研究代表者

茅根 紀子 (CHINONE NORIKO)

早稲田大学・文学学術院・助手

研究者番号：70608380

研究成果の概要（和文）：

報告者は、15世紀のアントニウス会士が行った三つの美術寄進活動を、教会政治の文脈から読み解くことで、歴史学領域と美術史学領域を横断する新たなアントニウス会美術研究を構想した。教会政治文脈に着目することで各作例の解釈を深めることができた一方、全てを教会政治との因果関係からのみ考察することは、寄進者の創造性を矮小化してしまうことが明らかになった。この問題については、科研費プロジェクト「創造的行為者としての寄進者」にて考察していく。

研究成果の概要（英文）：

The concept basically comprises a novel approach to investigate the hospital brothers of St. Anthony. Crossing over the historical and arthistorical field, three foundations of a hospital brother from 15th century are to be interpreted in an ecclesiastical context. Yet, although the interpretation s were deepened, within this approach, it became obvious that an investigation which centers exclusively on the ecclesiastical context, provokes a rather limited conception of the founder's creativitiy. I will continue to work on this problem in the forthcoming JSPS research project "A founder as creative actor" in 2013-2016.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2011 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総 計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・美術史

キーワード：アントニウス会、キリスト教美術、15世紀、寄進活動

1. 研究開始当初の背景

聖アントニウス修道会（以下「アントニウス会」）は、1095年、フランス南東部のサンタントワーンに小さな医療兄弟会として始まり、聖アントニウスの火と呼ばれた疾病撲

滅と、エジプトの聖アントニウスへの崇敬拡大を使命としていた。適切な医療活動によってビザンティン世界にまでいたる一大版図を築き上げ、1297年アグスティヌス律に従う参事会へと格上げされる。

1923年、メイエ・ギィによって史料批判に

基づく基礎的なアントニウス会研究が始まり (Maillet-Guy, *Les grands preirius de l'abbaye de saint-Antoine*, Lyon 1923)、1976年にミシュレフスキーの著したアントニウス会研究 (Mischlewski, *Grundzüge der Geschichte des Antoniterordens bis zum Ausgang des 15. Jahrhunderts*, Köln-Wien 1976) は、今日まで本領域における研究の指針だが、編年の記述に留まる。

報告者は、修士課程より一貫してアントニウス会美術研究を行っており、解釈の難しい「イーゼンハイム祭壇画」第二面について新知見を提示したが (Chinone, “Die Verkündigung und das Engelskonzert des Isenheimer Altars aus der Perspektive der Raumkonstruktion”, *Antoniter-Forum*, 18, München 2010, S. 25-50)、同作例を画家個人の作品としてのみ扱うことに限界を感じた。

2007年に松下国際財団より助成を受け、アントニウス会研究史を調査した結果、アントニウス会に由来する美術は個別的に扱われ、アントニウス会美術という文脈において考察されることが殆どなく、美術史的に未踏領域の多い分野であることが判明した。

そこで本研究計画では、注文主であるアントニウス会に焦点をあて、美術史的アントニウス会美術研究と歴史学的アントニウス会研究が融合されるような、より包括的な視点からアントニウス会美術研究を行うことを構想した。

2. 研究の目的

2000年に中世史家ボルゴルテが寄進研究シリーズの刊行を開始し、我が国においても「寄進の比較史」をテーマとしたシンポジウムが、2007年の歴史学研究大会にて開催されたように、寄進活動は近年とみに注目を集めるテーマである。

教会ミサの創設から病院建設まで「寄進 (fundatio)」と定義される寄付活動は様々だが、本研究では宗教美術創作への金銭的寄与に限定して考察を行った。なお、芸術活動に財政援助を行う活動として「パトロネージ」があるが、これは裕福な後援者と芸術家との関係性を定義する。自宅に飾る世俗画制作なども含んでおり、寄進物を「他者に贈与」する寄進活動とは異なることに留意したい。寄進とは、大貴族から市井の人々にいたるまで広く行われていた、一般的宗教行為の一つである。

報告者は、本科研費より助成を受け、寄進活動に熱心であった15世紀前半のアントニ

ウス会士ジャン・ドゥ・モンシェニュに注目し、アントニウス会史と関連付けながら、彼の美術寄進活動を扱うこととした。

モンシェニュは、1418年に参事会長であった兄が死去した際、若くして会長に選出されるが、教皇マルティヌス5世によって選出結果が一方的に無効化され、その後は参事会 No.2 として活躍する。熱心な美術寄進者としての一面もあり、「写本『聖アントニウス伝』(フィレンツェ版)」、「アントニウス会サントアントワヌ母院附属聖堂聖三位一体礼拝堂」、「アントニウス会ランヴェルソ分院改築」と、三つの寄進を行っている。

三作例に関して、先行研究では年代推定と制作工房の特定に留まってきた。一方報告者は、図像解釈学的・教会史学的アプローチから分析することによって、これまで分断されてきた歴史学的アントニウス会研究と美術史的アントニウス会美術研究との融合を試みた。また、彼の政治的野望から寄進活動が行われたとの仮説に基づき、教会史学の成果を踏まえた多角的視点より寄進活動を検証し、教会政治戦略としての寄進活動という新たな理論の構築を目標に据えた。

.....

具体的には、五つの研究目的を設定した。

(1) 写本『聖アントニウス伝』(フィレンツェ版)の考察

本写本は、バーゼル公会議 (1431年～1445年) が召集された際、教皇エウゲニウス4世に贈呈された。コッカーエル、グラハム (Graham, *A Picture Book of the Life of Saint Anthony the Abbot*, Oxford 1937) らが研究に着手するが、その後の進展はない。

報告者は、被寄進者である教皇エウゲニウス4世の名が記された奥付の最後の一文が、他の部分と別の手によるものであることに注目した。前教皇マルティヌス5世の在位中に、まだ名の知れぬ次の教皇への贈呈品として、なんらかの理由からかなり早い時期に写本が制作されていた可能性が考えられる。教会政治的文脈に即して、制作の意図を考察する必要がある。

(2) アントニウス会サントアントワヌ母院附属聖堂聖三位一体礼拝堂の考察

アントニウス会の母院があるサントアントワヌには、アントニウス会母院附属聖母聖

堂が残っている。本聖堂南側壁に並ぶ脇礼拝堂の一つとして、モンシェニュは聖三位一体礼拝堂を設立したが、宗教戦争の折に殆ど破壊された。

ディジョン(Dijon, *L'Église Abbatiale de Saint-Antoine en Dauphiné. Histoire et Archéologie*, Grenoble-Paris 1902) による先行研究は、設立の年代と背景を明らかにするに留まっている。

正面奥壁に開けられたステンドグラスの下部にはリュネット型の壁龕が設けられているが、壁龕上部にはフレスコ壁画《港町》が良好な状態で残存する。俯瞰的な視点から港町に船が行き交う様が描かれており、宗教的モチーフが見当たらない、15世紀半ばとしては風変わりな風景画と言える。図像学的調査に基づき作品解釈を行う必要がある。

(3) アントニウス会ランヴェルソ分院改築の考察

トリノ近郊に位置するランヴェルソ分院は15世紀に大々的な改築が行われ、当分院長を務めたモンシェニュは長期に渡って寄進を行っている。サヴォワ宮廷画家ジャコモ・ヤケリオの作例が残され、高い芸術的価値を有する。

近年出版された「Gritella, *Il colore del gotico. I restauri della precettoria di S. Antonio di Ranverso*, Savigliano 2001」によって、分院の建造年代やその背景、工房などは明らかにされているが、モンシェニュの寄進活動の解釈にまではいたっていないため、装飾プログラムの解明が求められる。

(4) 教会政治戦略としての寄進活動という新たな理論の構築

これまでの寄進活動研究は、寄進者の死後も社会的一員であるかのように扱われるという「メモリア」概念によって考察されてきた。報告者は三つの美術寄進作例を、教会政治戦略というアプローチから読み解き、寄進活動理論を構築することを構想した。

(5) アントニウス会関係一次史料の編纂・出版

本研究では、寄進者モンシェニュの人生を一次史料に即して調査することが求められる。しかしアントニウス会は、中世・ルネサンス社会において重要な地位を占めていたにもかかわらず、歴史学研究における知名度が低く、一次史料の編纂なども全く進んでいない。

そこで報告者は、アントニウス会研究全体

に貢献するため、副次的プロジェクトとして、モンシェニュだけに限らない基礎的なアントニウス会関係一次史料の編纂・出版を構想した。

なお、作業に必要となる研究アシスタント雇用費が不足したため、2012年度早稲田大学特定課題研究費を新たに獲得し、プロジェクトを進めた。

3. 研究の方法

(1) 写本『聖アントニウス伝』(フィレンツェ版)の考察

本写本の親本となった、ほぼ同じ図像を持つマルタ国立図書館蔵のヴァレッタ版「聖アントニウス伝」の現地調査を行い、写本学的見地から比較検討した。また、メディチ版の奥付を手掛かりに、教会政治的文脈から考察を試みた。

(2) アントニウス会サンタントワヌ母院附属聖堂聖三位一体礼拝堂の考察

報告者は、寄進者が死後の巡礼をイメージさせるものとして、現在は失われている自らを模った墓標彫刻の背景に、聖地エジプトの様子を描かせたと推察している。しかし、中世ヨーロッパにおけるエジプトのイメージに関する体系的な研究はこれまでないため、図像学的見地から、中世人にとってエジプトのイメージが港町と連想される形で存在していたかどうかを明らかにすることを試みた。

パラヴィチーニによる聖地巡礼記(Hrg. v. Paravicini, *Europäische Reiseberichte des späten Mittelalters. Eine analytische Bibliographie. Teil 3. Niederländische Reiseberichte*, Berlin 2000)を手掛かりに、中世における聖地巡礼記の挿絵を調査した。また、トスカーナにて「テーベの隠遁者」図像を渉猟した。

また当時の教会史に即して、寄進者がエジプトの情景を自らの横臥像の背景に描く動機となるような出来事は無いか調査を行った。

なお、科研費受給が始まる前の研究資金として、2011年度早稲田大学特定課題研究費をあてた。

(3) アントニウス会ランヴェルソ分院改築の考察

現地で写真撮影を行うと共に先行研究を

渉猟し、モンシェニウの寄進作例を、サヴォワ美術・アントニウス会美術の文脈から図像学的に考察した。

(4) 教会政治戦略としての寄進活動という新たな理論の構築

寄進活動研究が盛んなドイツ語圏の文献を渉猟し、昨今の研究動向を調査し、報告者による寄進活動研究理論がどのように位置づけられるのかを確認した。

また歴史学におけるアントニウス会研究を渉猟し、寄進者ジャン・ドゥ・モンシェニウの教会政治における動向を明らかにした。

(5) アントニウス会関係一次史料の編纂・出版

報告者と懇意であるアントニウス会研究の第一人者ミシュレフスキー博士（ミュンヘン在住）は、これまで多くの研究成果を挙げてきたが、彼が半世紀以上に渡って収集してきたアントニウス会関係一次史料に関する手書きの調査カードは、現在まで未発表のままである。報告者は史料編纂事業の手掛かりとして氏の協力を得、彼の調査カードに批判を加えながら編纂することにした。

ローマ市立古文書館蔵の Libri Quietantiarum を取り上げ、アントニウス会に関連するデータをまとめることとした。

4. 研究成果

(1) 写本『聖アントニウス伝』（フィレンツェ版）の考察

マルタ国立図書館、フィレンツェのラウレンツェアーナ図書館における現地調査によって、ヴァレッタ版、フィレンツェ版共に、修復痕が見られることが分かった。両写本は綴じ順が異なっているが、先行研究ではこれまで、ヴァレッタ版が正しい順番とされてきた。複数の聖アントニウス伝から編纂された両写本の正当な綴じ順を見極めることは難しいが、写本学的見地に立った考察が更に求められる。

一方制作背景の解明に関しては、アントニウス会史、公会議史を洗うことで、大きな成果を上げることができた。

モンシェニウは、1418年に参事会長であった兄が死去した際、若くして会長に選出されるが、教皇マルティヌス5世によって選出結果が一方向的に無効化され、その後は参事会

No.2として活躍する。

しかし若くして参事会の頂点に上り詰めた彼は、マルティヌス5世によってその地位を失った後も、参事会長再選出の野心を持ち続けた。マルティヌス5世死後に再選出の機会をうかがっていたと考えられる。本写本は、新教皇下における教会政治戦略として、あらかじめ制作されたのである。よって奥付の最後に記された「教皇エウゲニウス四世に捧げる」の一文は、後から書き加えられたのである。

1438年7月、バーゼル公会議開催中にアントニウス会会長が死去し、次期会長選出が難航していた。当時の史料からは、モンシェニウが会長選に再び打って出るも、フィリップ善良公の庇護を受けたブリオンに競り負けたことが伺われる。

本研究の成果として、アントニウス会研究誌にて投稿論文が受理された（Chinone, “liber vitae sanctissimi anthonii (Hs. Florenz Medic. Palat.143) im kirchenpolitsichen Kontext”, Antoniter-Forum, 20, 2013, S.53-71 (in print)）。

(2) アントニウス会サンタントワース母院附属聖堂聖三位一体礼拝堂の考察

報告者はまず縁起書より、本礼拝堂はモンシェニウ家の墓廟として寄進されたもので、《港町》は壁龕式墓標に収められていた彼の横臥型墓標彫刻の背景であったと推測した。フレスコ画は一見純粹風景画様にも見えるが、風景画を背景にした流行の肖像画形式から派生したものとするのが妥当だろう。

次に「港町」図像の調査を行った。申請者はエジプトを舞台にした「テーベの隠遁者」図像や中世の巡礼記写本、「港町」の画家の出身地と考えられるサヴォワ地方における壁画を体系的に調査し、聖地巡礼と港町のイメージが連想的な関係にあることを明らかにした。

また、エジプトのアントニウス修道院に西欧からの巡礼者が到達していたこと、フィレンツェ公会議にエジプトのアントニウス修道院修道士が訪問していたことから、15世紀半ばにおいて、エジプトのアントニウス修道院への興味が高まるような気運があったことが分かった。

中世では、生前行けなかった巡礼を代理人に依頼する死後巡礼の慣習があったが、モンシェニウは、崇敬する聖アントニウスの故郷エジプトを巡礼する「死後巡礼」のイメージ

として、自らの横臥像の背景に聖地を連想させる港町を描かせたと考えられる。

本研究成果については、ドイツ教育省から渡航費助成を受け、国際美術史学会にてポスター発表を行った(Chinone, “Hermeneutik des Abwesenden: die Rekonstruktion der Trinitätskapelle der Antoniter-Abteikirche in Saint-Antoine”, CIHA 2012, 33. Internationaler Kunsthistoriker Kongress, on 16.-20. July, Nurnberg)。

(3) アントニウス会ランヴェルソ分院改築の考察

先行研究の調査より、モンシェニュは、正面ファサード、内陣壁画、南鐘楼上部に設けられた質素な個人礼拝堂の三つを寄進していたことが明らかになった。また、各図像主題についての考察は進められているものの、モンシェニュによる装飾プログラム全体の解釈は試みられていないことがわかったため、報告者が考察を進めた。

正面ファサードには洗礼者ヨハネと福音書記者が聖母子の両脇に配されるが、寄進者モンシェニュのファーストネームにちなんだ聖人であると考えられる。サヴォワの作例と比較検討した結果、内陣の装飾プログラムでは、アントニウス会とサヴォワの図像伝統が調和を見せており、モンシェニュは宮廷画家ヤケリオと対話的關係の中で装飾プログラムを構想したことが明らかになった。

寄進者像を伴った聖母子像下部には、装飾に溶け込むように類例の見られない無地の紋章モチーフが描きこまれており、寄進者の家系を示唆するにとどまる。これはモンシェニュの創意であることが伺われる。聖母子像の左右には、寄進者の名を冠する洗礼者ヨハネと聖アントニウス、異端と闘った聖ヒラリウスと聖マルティヌス、大天使ミカエルが表され、モンシェニュの異端に対する何らかの神学的な意図が表されたものと考えられる。個人礼拝堂に描かれた《キリストの磔刑》は、懇意であった有力諸侯サヴォワ公アマデウス8世を想起させる聖マウリティウスと寄進者像を伴う。私的な図像の両脇には二つの紋章によってモンシェニュ家が誇示されている。内陣壁画に紋章が表されなかったのに比べ対照的である。しかし彼の自尊心は文字通り私的な空間に隠匿されている。

以上のことから、寄進者としての自己表出の相違が装飾プログラムに影響を与えており、中世末期の寄進者達が造形の成立に積極的な役割を果たしていた様子が具体的にう

かがえる。教会政治の文脈からのみでは説明できない、モンシェニュの寄進者としての自意識と造形的独創性が明らかになった。

本研究成果については、美術史学会東支部例会にて口頭発表を行った(茅根紀子「アントニウス会ランヴェルソ分院附属聖母聖堂の装飾プログラム考察—造形成立における寄進者の役割」、美術史学会東支部例会、於：東京藝術大学、2013年1月26日)。

(4) 教会政治戦略としての寄進活動という新たな理論の構築

先行研究では十分に検討されてこなかった三つの寄進作例について、報告者は教会政治に焦点をあて、様々なアプローチから考察を重ねることによって、幾つかの新知見を提示するに到った。一方、全体の構想という枠組みから考えた場合、問題点が明らかになった。

そもそもの出発点は、モンシェニュによる寄進活動の考察を通して、これまでメモリア概念から研究が行われてきた美術寄進活動一般を、教会政治という新しい文脈で捉えなおすことだった。しかしこの手法では、先行研究がメモリア概念によって寄進活動を一義的に読み解いてきたのと同様、教会政治という報告者の設定した文脈へと、モンシェニュの多様な作品を機械的に位置づける作業となり、寄進活動のあり方を矮小化することにつながる。

また、主に歴史学研究として発展してきた寄進活動研究を、美術史学のテーマとして取り組むためには、もっと歴史学と美術史学の違いについて考察を深めるべきではないか。これまでの成果を生かしつつ、これらの問題点に配慮しながら、研究全体の構想を新たに必要がある。

報告者は次の科研費プロジェクト(2013年度～2016年度)「創造的行為者としての寄進者」にて、寄進者の造形美術への創造性に焦点をあて、さらにこの問題と取り組んでいく。ここでは、美術史家アロイス・リーグルによる「芸術意思」概念に基づき、寄進活動と造形成立の間の関係性について、概念的かつ実証的に考察を深めていく予定である。

美術史学的寄進活動研究の可能性については、イタリア歴史文化研究会にて口頭発表を行った(茅根紀子「中世寄進活動研究における美術史学的方法論の可能性—15世紀アントニウス会ランヴェルソ分院の考察」、イタリア歴史文化研究会、於：明治大学、2013年4月28日)。

(5) アントニウス会関係一次史料の編纂・出版

ローマ市立古文書館から取り寄せた一次史料の写真を確認しながら、ミシュレフスキー氏とやりとりをしながら2度の校正を行った。氏は高齢でミュンヘン在住であるが、インターネットや郵便を用いて滞りなく作業を進めることができた。Monumenta germaniae historica のヘルベルト・シュナイダー博士（ミュンヘン在住）に助言を頂き、文書に繰り返し登場する文言を省略記号で記すことにした。これまでの研究成果は Antoniter-Forum の HP へアップロードを行った (<http://www.antoniterforum.de/urkundenmaterialien>)。

これに準備中の序文と索引、注釈を付け、最終校正を行った上で Antoniter-Forum 学会誌特別版として出版する予定である。出版数は Antoniter-Forum 会員並びに図書館等からの要望を鑑み、200 部を予定している (Antoniter in den Libri Quietantiarum (1396-1511), Hrg. v. Chinone, Verlag der Gesellschaft, 2013 (in print))。

報告者は美術史家であり史料の扱いに関しては素人であるが、多くの専門家に教を乞うことで史料編纂を正統なプロセスを経て行うことができた。アントニウス会研究にとって、本史料集は初めての史料編纂事業となる。史料の編纂が進めば歴史研究におけるアントニウス会への注目も高まると考えられ、改めて本研究の重要性を痛感した。報告者は自身の美術史学的考察と並行して、今後もミシュレフスキー文書を手掛かりとして、一次史料の編纂事業を継続していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- Noliko Chinone, “*liber vitae sanctissimi anthonii* (Hs. Florenz Medic. Palat.143) im kirchenpolitsichen Kontext”, Antoniter-Forum, 20, 2013, S. 53-71 (in print) (査読有)。

〔学会発表〕(計3件)

- 口頭発表：茅根紀子「中世寄進活動研究における美術史学的方法論の可能性—15世紀アントニウス会ランヴェルソ分院の考察」、イタリア歴史文化研究会、於：明治大学、2013年4月28日(査読無)。

- 口頭発表：茅根紀子「アントニウス会ランヴェルソ分院附属聖母聖堂の装飾プログラ

ム考察—造形成立における寄進者の役割」、美術史学会東支部例会、於：東京藝術大学、2013年1月26日(査読有)。

- ポスター発表：Noliko Chinone,

“Hermeneutik des Abwesenden: die Rekonstruktion der Trinitätskapelle der Antoniter-Abteikirche in Saint-Antoine”, CIHA 2012, 33. Internationaler Kunsthistoriker Kongress, on 16.-20. July, Nurnberg (査読有)。

〔図書〕(計1件)

- Antoniter in den Libri Quietantiarum (1396-1511), Hrg. v. Noliko Chinone, Verlag der Gesellschaft, 2013 (in print)。

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

Antoniter-Forum Urkundenmaterialien

<http://www.antoniterforum.de/urkundenmaterialien>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

茅根 紀子 (CHINONE NORIKO)

早稲田大学・文学学術院・助手

研究者番号：70608380

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし